

4 ^{ちやうす}茶臼 1 箇 [有形文化財（工芸品）]

[所在地] 宇陀市榛原赤埴 1684 番地

[所有者] 佛隆寺

[法 量] 総高 26.8 cm

[時 代] 中国・元代（14 世紀）

[概 要]

茶臼は、蒸した茶葉を挽いて抹茶を製造する道具である。中国・北宋代（960—1127）に発明されたとされ、点茶法の受容とともにわが国に普及した。初期の茶臼すなわち中世前期にさかのぼる茶臼は、遺品に乏しく希少なものであるが、「唐茶磨」と称される中国・宋元からの輸入品が占めていたと考えられている。

佛隆寺に伝来した本品は、挽木を取り付ける孔が1箇所で、挽木座は菊座に折れ枝を配するという他に見ない意匠であり、側面に唐獅子の浮彫りが表されるのも珍しい。花崗岩製で上臼が丈高であることや、下臼受皿に把手を設けるのが古い形式であること、他方で下臼の台底面に挟りをつくるなどのやや時代が下る要素が認められることを鑑みて、14 世紀前半頃に製作された中国産茶臼と位置づけられている。完形品として伝世した唐茶磨の最古例は、現在、京都・野村美術館が所蔵するものが13 世紀後半とされているが、本品はそれに次ぐ最古級の遺品の一つである。付属品である木製の挽木と心棒も茶臼本体と同時期のものとみられ、一具の舶来品と推定される貴重な遺品である。

佛隆寺には「仏隆寺靈宝茶臼縁起」（文化5年（1808）書写）が伝えられており、大和茶発祥の地という伝承が形成されるなかで、本品が弘法大師将来との由緒から古く珍重されてきたことが跡づけられる。本品は、完形品として伝世した数少ない茶臼の遺品であるとともに、地域の産業史に深く結びついた文化財としてその意義は大きい。

